

地震・豪雨、災害は全国どこでも起きる

9月は防災月間です。本校では22日に避難訓練が行なわれます。

まずは、自分の身は自分で守ること。そして、自分と家族のための日頃の備えが大切です。

9月1日は防災の日です。1923年9月1日、関東大震災が発生しました。その大惨事を忘れないため、また、この時期は台風の被害が多いことから「防災の日」と定められました。先週8日にも、メキシコでM8.2の巨大地震が発生し、甚大な被害が発生、その夜には秋田県でもM5.3、震度5強の地震が起こり、余震はまだ続いています。さらなる災害と被害の拡大が起こらないことを、心から願うばかりです。

近年、大きな地震が全国、いや世界各地で起こるようになり、いわゆる「地震の活動期」に入ったとも言われています。これから台風のシーズンもやってきます。私たちがふだんからの備えとして、自分の住んでいる地域のハザードマップ（被害想定地図）を確認する、緊急避難道具や非常食を準備しておく、そして学校や外出時に災害にあった際、どのようにしてご家族と連絡をとりあうか、その方法と集合場所も必ず話し合っておきましょう。

ハザードマップ 被災想定区域や避難場所・避難経路などの防災関係施設の位置などを表示した地図で、地方自治体ごとに作成され、インターネット上でも公開されています。あなたの家のある地域は、南海トラフ地震ではどのくらいの揺れが予想されるか、水害や津波の想定水位はどのくらいかなどが、色分けされひとめで分かるようになっています。「ハザードマップ 京都市」「ハザードマップ 大阪」など、「ハザードマップ 自分の住んでいる地域」でさっそく検索してみましょう。

被災地応援の第一歩は知ること、そして 忘れないこと

震災から、6年半、まだまだ復興には遠い、想像以上に大変厳しい現実の姿です。

原発事故 福島・双葉郡の住民調査「約6割が無職」 2017年9月6日 NHKニュースより一部紹介

福島大学などの研究グループは、福島第一原発が立地する双葉（ふたば）郡の住民を対象にアンケート調査を行い、その結果をまとめました。無職の人がおよそ6割に上るなど、生活再建が進んでいない実態が浮き彫りになりました。正規の従業員、職員が20.6%、派遣社員や契約社員、アルバイトが7.8%となっている一方、無職が事故前の倍近い55.5%で、前回より1.2ポイント増加しました。

住宅については、購入、再建した自宅が44.8%、仮設住宅とみなし仮設住宅が合わせて24.5%、災害公営住宅が7.9%などとなっていて、定住する場所が決まった住民は、およそ半数にとどまっています。

ふるさとに戻りたいかどうかや時期については、「近年中」と「将来」が合わせて17.1%でした。一方「戻る気はない、戻れない」は58.8%で、自治体別では、町の大部分が帰還困難区域に指定されている大熊町が70.6%、双葉町が69.7%と高くなっています。生活で困っていることは、「健康・介護」が53.4%、「生活費」が35.3%で、前回調査で24.6%だった「周りの人との人間関係」が34.9%と増加しました。

福島第一原子力発電所の廃炉工程はまだ長く

その周辺に住むこと、環境をもとに戻そうと働いている方々の本音を新聞紙面から紹介したい。実は全国各地のさまざまな年齢の方が今この瞬間も除染作業に汗を流し、「感謝」や「孤独」を感じながら「再出発」を目指しています。

2017年9月5日(火)毎日新聞 朝刊 29面より

原発廃炉や除染に従事する「復興作業員」が全国から集まっている。廃炉関係だけでも1日5000人超に上るが、地域との深い交流はなく、専用宿舎と職場を往復する人が多い。その作業員たちにそれぞれの事情を聞いた。

[家屋解体] 大阪 20代:関西出身で阪神大震災の時にいろいろな人に助けってもらった感謝の気持ちがある。恩返しにきた。

[道路建設] 北海道 30代:離婚した妻子、両親とは音信普通で独りぼっち。福島での仕事に反対者はいない。

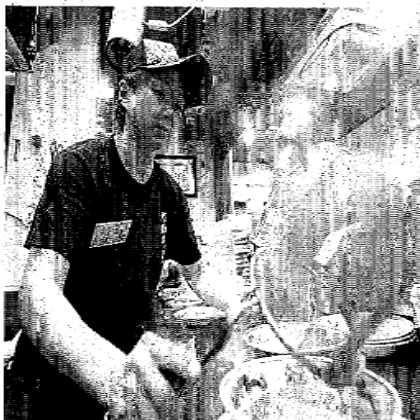
[土木工事] 広島 20代:家族は「放射線が心配。早く帰ってこい」というが、ここは人も住んでいる。心配はない。

[原発廃炉] 福島 60代:30年以上も原発で働いてきた。事故直後は家族と一緒に非難したが、仕事があるから戻ってきた。

被災された方々も、そして私たちも、頑張っています！

2017年9月7日(木)毎日

原発事故で避難生活 松本仁枝さん



手際よく京都風ラーメンを作る松本仁枝さん
—福島県いわき市で、喜屋武真之介撮影

東京電力福島第一原発事故後、約4年間、京都市で避難生活を送った松本仁枝さん(46)が、福島県いわき市で京都風ラーメンを出す店を構え、ファンを増やしている。シングルマザーの自分を支えてくれた京都の人たちへの感謝を一杯に込める。車で50分ほど離れた富岡町の自宅は「帰還困難区域」のままで帰郷はかなわないものの、持ち前のたくましさで一歩ずつ道を切り開いている。【岸慶太】

京都に感謝込め 店名「おおきに」

「おおきに」。ちょ、鶏ガラと豚骨のスープ、つぶりぎもちない関西に豚の背脂が浮かび、弁て客を店から送り出 九条ネギを添えたラーメン。JRいわき駅前にメンが売り。福島の人店を構え1年9カ月。の好みに合わせスープ

「おおきに」。後ろにも目を付けた。ミスをするれば容赦なく店長に怒鳴られ、半年たっても肝心のラーメンづくりを仕込んでもらえない。「もっと教えてください」と涙ながらに食い下がっても、「誰

はあっさりめにする工夫で常連客も増えた。6年前まで富岡町で原発作業員向けの宿舎を営んでいた。原発事故が起きると、長男を連れて各地を転々とし、京都市内の団地にたどり着いた。

1年たっても古里の避難指示は解除されず「いつ福島に戻れるのだろう」と不安が募った。長男を育てるために職がほしい。働いた飲食店で、「名店」と聞かされたラーメン店を思い出し、門をたたいた。

週6日、深夜まで働いた。「後ろにも目を付けた」。ミスをするれば容赦なく店長に怒鳴られ、半年たっても肝心のラーメンづくりを仕込んでもらえない。「もっと教えてください」と涙ながらに食い下がっても、「誰

はあっさりめにする工夫で常連客も増えた。6年前まで富岡町で原発作業員向けの宿舎を営んでいた。原発事故が起きると、長男を連れて各地を転々とし、京都市内の団地にたどり着いた。

1年たっても古里の避難指示は解除されず「いつ福島に戻れるのだろう」と不安が募った。長男を育てるために職がほしい。働いた飲食店で、「名店」と聞かされたラーメン店を思い出し、門をたたいた。

週6日、深夜まで働いた。「後ろにも目を付けた」。ミスをするれば容赦なく店長に怒鳴られ、半年たっても肝心のラーメンづくりを仕込んでもらえない。「もっと教えてください」と涙ながらに食い下がっても、「誰

に言う「とんねん」とはねのけられた。でも、そんな対応が「避難者」と特別扱いされるより、心地よかった。

3年後の2015年7月、独立を許された。古里に近いいわき市で店を構えることを店長に伝えた。「まっちゃんなら絶対にできるわ」。そう励ましてくれた。

福島に戻ると、京都での日々がふとよみがえってきた。「これ使

福島でラーメン店開業

実行委員会活動報告

地域の夏まつりで募金活動

7月31日、新大宮の夏祭りに出展し、オリジナルバックやペンを販売しながら被災地の現状を伝え、募金を募りました。この日お預かりした募金額は、

46676円でした。

神戸と淡路島で地震を体験

8月1日、淡路島の野島断層と、神戸の「人と防災未来センター」で校外学習を行いました。

阪神淡路大震災を引き起こした活断層と被災家屋の破壊の大きさを目の当たりにし、さらに震災体験館や大迫力の映像で、同震災および東日本大震災の激しい揺れを迫体験し、「このような恐怖を経験された方々に、今後どう寄り添っていくべきか」考え、かつ自身の防災意識を高めるきっかけを得た、たいへん貴重な一日となりました。